

「フランス現代戯曲を読む——ドラマリーディング」

2001/12/14-15 ドラマリーディング+シンポジウム studio21

地下室

2001年12月14日(金) 6:00pm

作=エマニュエル・ダルレ

演出=川村毅

出演=小沢寿美恵、新井純、笠木誠、登山貴弘、友田憲弘

『地下室』 Souterrains

——とあるマンション。夜。物音に怯える男と女。隣の部屋を覗く男と女。長年の恨みつらみを言い続ける老姉妹。そして、昼間は身を隠し、夜に建物の中を徘徊する男——同じ時間、同じ空間に存在するいくつかの現実世界の中で、自分自身の盲目さゆえに他人に対して心を開くことができない人々を描いた作品。2001年作。

アンヌ・マリ

2001年12月15日(土) 6:00pm

作=フィリップ・ミンヤナ

演出=宮沢章夫

出演=宋ひさこ、塚本耕司、小田豊

『アンヌ・マリ』 ANNE-MARIE

——20年前。フランス東部の村にある広いけれども住みにくそうな家。三世代が同居、まったくと言っていいほど愛情はなく殺伐とした雰囲気。ドアの隙間からおそらく近所の者たちであろう二人の男が、家の中にいる年老いた女とその娘の様子を観察している——ラジオドラマのために執筆された、独創的で鋭く句読点のない性急なエクリチュール、それらが特徴的な作品。2000年作。

シンポジウム「フランス演劇の現在」12月15日(土) 7:00pm

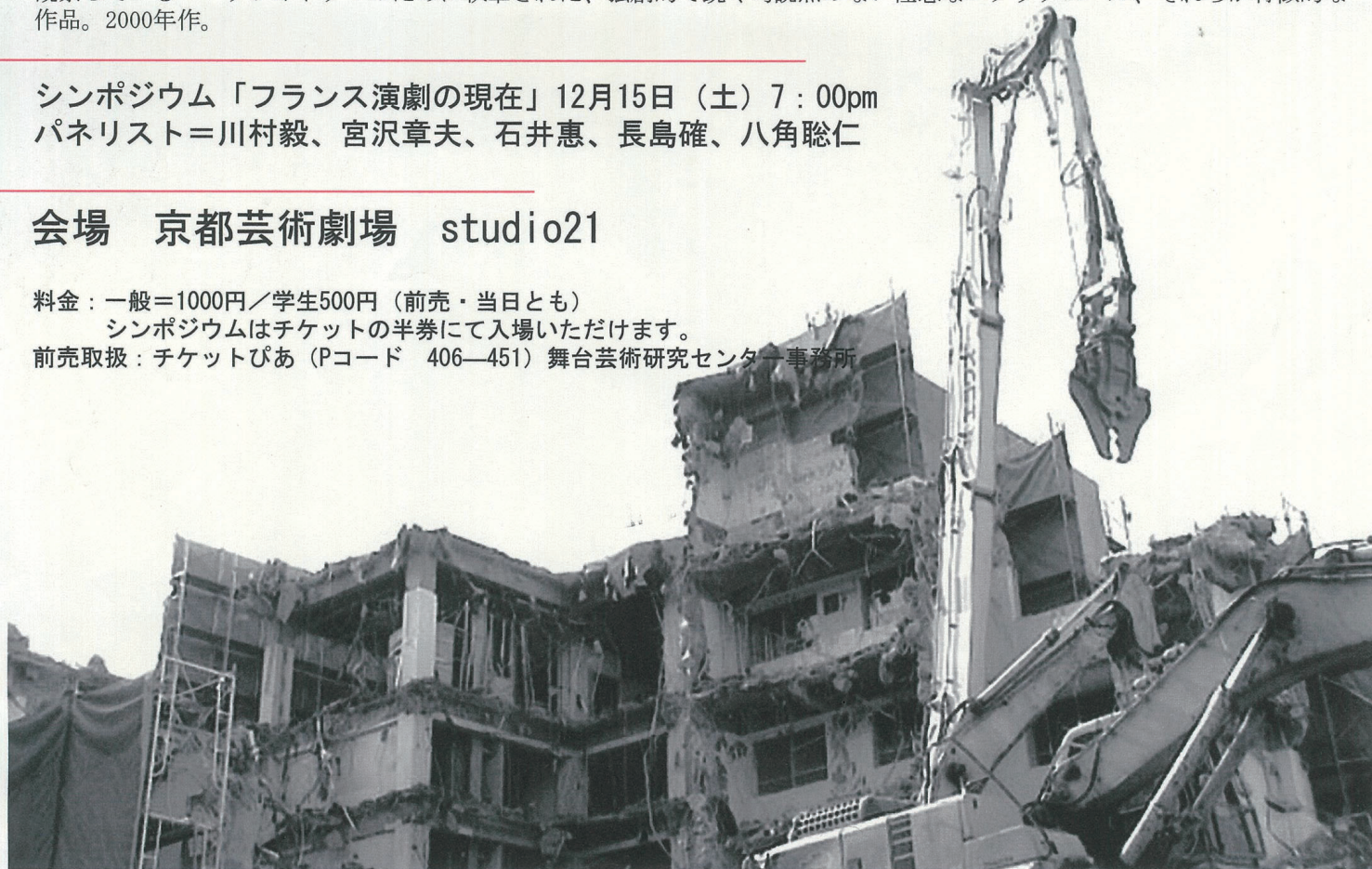
パネリスト=川村毅、宮沢章夫、石井恵、長島確、八角聡仁

会場 京都芸術劇場 studio21

料金：一般=1000円/学生500円（前売・当日とも）

シンポジウムはチケットの半券にて入場いただけます。

前売取扱：チケットぴあ（Pコード 406—451）舞台芸術研究センター事務所



『地下室』について エマニュエル・ダルレ

『地下室』ははじめラジオドラマとして、つまり聞くためのものとして書かれたもので、隣人がお互いに他人の会話に聞き耳を立て、監視し合うという筋や、三つの場があって、しかもそれがすべて夜の場面だという点でも、舞台の上で演出するのは容易ではありませんが、面白い試みになるでしょう。この戯曲は軽い調子ではじまります。はじめの二場は、お互いに観察し合い、別の場所できていることを聞くという、奇妙な形で書かれています。こういった状況の中で、ユーモアと同時に、心配や不安が浮かび上がってきます。第三場もその前の二場と呼応していて、それにある種の説明を与えるものではありませんが、テーマ(老いや孤独など)、それに多少暖かみのある文体、といった点で、他の二場と異なっています。現代のわたしたちの生活、人と人との間につながりがいない生活。誰もが自分の殻に閉じこもって、隣人さえ見ずに暮らしていること。これはそういった生活についての戯曲なのです。これがこの題名の意味です。わたしたちの間では、地下で、見えないところで、視線を逃れたところで、他のどうでもいいことと一緒に、苦痛と孤独が行き交っています。こういったことについて、人は小さな声で、自分に向かってつぶやくのですが、これは誰の耳にも届かないのです。(翻訳:横山義志)

川村 毅 (かわむら たけし)

1959年東京生まれ。明治大学政経学部在学中の80年、劇団第三エロチカ創設。以来座長を務める。劇作家・演出家。85年度岸田戯曲賞を『新宿八大伝 第1巻』にて受賞。96年、ACC日米芸術交流プログラムによりアメリカに滞在。98年ニューヨーク大学に客員演出家として招かれる。最近作に『わたしの心臓』(2000)などがあり、2001年12月には文学座への書き下ろし作品『牛蛙』が上演された。戯曲集、小説多数。2002年度より京都造形芸術大学映像舞台芸術学科助教授就任予定。

小沢 寿美恵 (おざわ すみえ)

劇団くるみ座、劇団樺を経て、劇団昴所属。最近の主な舞台に『熱いタン屋根上の猫』『アルジャーノンに花束を』『ワーニャ伯父さん』『罪と罰』『怒りの葡萄』(平成12年度芸術祭大賞受賞)、『児島源治郎の遺言』(俳優座劇場)、『プレイハウス・クリーチャーズ』(シアターx)など。また、テレビ、ラジオ、吹き替え等にも多数出演。今年9月サイエスタジオ公演『大江山』『棺間・松乃家蝶六』で初めて演出を手掛けた。

新井 純 (あらい じゅん)

東京出身。俳優座付属俳優養成所16期卒。劇団自由劇場を経て、黒色テント創立に参加。1995年黒テントを離れ現在フリー。80本以上の舞台歴の他、映画、テレビ、ラジオに出演。『阿部定の犬』の'あたし'により第10回紀伊国屋演劇賞を受賞。結城人形座『マクベス』(ベオグラード国際演劇祭特別賞受賞)のマクベス夫人役に出演、北欧や旧ソ連公演に参加する一方、アジアの国々と演劇ワークショップでの交流など幅広い交流を続け、最近では作曲家・林光氏とのジョイントコンサートや「ソングの森」などのコンサート、語りの会なども行っている。著書に『風の舞台』(筑摩書房)がある。

笠木 誠 (かさぎ まこと)

1991年第三エロチカ入団。『マクベスという名の男』北米ツアー、アデレードフェスティバル、NY公演等参加。1996年『オブセッション・サイト』初主演。以降中心俳優として『オイディプス、WHY?』『ハムレットクローン』『わたしの心臓』『近代能楽集』より『卒塔婆小町』『ニッポン・ウォーズ』等出演。

登山 貴弘 (とやま たかひろ)

東映アカデミー卒業。イメージフォーラム付属映像研究所を経て1995年第三エロチカ入団。『オイディプス、WHY?』『ハムレットクローン』『わたしの心臓』『近代能楽集』より『弱法師』『ニッポン・ウォーズ』等出演。

地下室

Souterrains

12月14日(金)6:00開演

作＝エマニュエル・ダルレ

演出＝川村毅

出演

2の女、カミーユ 小沢寿美恵

1の女、エメ 新井純

1の男、2の男、3の男 笠木誠

登山貴弘、友田憲宏

「リーディング雑感」 川村毅

80年代初め、私が今の劇団を旗揚げした頃、同じ時期にパリ留学を終えて帰国していたU氏は、パリと比較して劇作家と新作戯曲が重要視、問題視される東京の演劇状況に強い違和感を表明していた。

同じ頃にシェロー、ラヴオーダンといった「演出家の時代」を牽引する演劇人が来日し、すでに早々に私達に紹介されていたムヌシュキンと「太陽劇団」の作業日誌の印象も加わって、するともはやフランスでは、劇作家と新作戯曲への興味はまるでないのだなと思わざるをえなかった。

U氏はそれからすぐに演劇評論を棄て、映画評論を執筆活動のメインとされていったのだが、U氏の絶望は私にとっても半ば理解できるものの、全面的には同調できなかった。

「演出家の時代」を支える長い上演史とその記憶を意識せずに古典戯曲を演出できる日本は、ある種の自由をあらかじめ得てはいるものの、それは上手に活用されてはいない。

しかし、何もここで嘆きたいわけではない。

あれから以後、日本において「演出家の時代」が到来したのかどうかということも、さて重要なこととも思えない。

「～の時代」といった鮮明なフレーズで規定される状況が演劇にとって幸福とも思えない。わかりやすく、おさまりのいい定義づけが、いともたやすくコマーシャリズムに横滑りしていく光景を私たちはもう幾度となく見てきたはずだ。

それが資本主義というものだ、という反論があるならば、私達は資本主義の倫理を新たに考えなくてはならない。

今回このリーディングを通してテアトル・ウヴェール活動を知ることができたのは、刺激的だ。

「演出家の時代」といった尊大で、まるで戦争開始を告げる議会の演説のなかで使われそうな、雑駁なキャッチフレーズの周縁にこうした活動がためられていたことを、私は今初めて知らされたのだ。

私に関していえば、ジャン・ジュネ以後、フランス語によって書かれた戯曲の言葉に遭遇していないのだ。

今や演出家と劇作家を別々の存在として考えることにどれほどの意味があるのだろうか。優れた演出家は常に優れた劇作家でいるはずであろうし、逆もまたいえるだろうから。

友田 憲宏 (ともだ のりひろ)

文学座付属研究所修了。NHKアクターズゼミナールを経て1997年第三エロチカ入団。『オイディプス、WHY?』『ハムレットクローン』『わたしの心臓』『近代能楽集』より『卒塔婆小町』『ニッポン・ウォーズ』等出演。

石井 恵 (いしい めぐみ)

1967年生まれ。学習院大学卒。パリ第3大学演劇科に学ぶ。現在、世田谷パブリックシアター学芸係。翻訳戯曲にコルテス『ロベルト・ズッコ』、ダリオ・フォ&フランカ・ラウメ『女がひとり』など。

スタッフ

舞台監督 武藤晃司

照明 大野道乃

音響 豊口謙次

翻訳 石井恵

ミンヤナのホームページ(<http://www.minryana.net/>)には、一般の観客や読者の質問に、ミンヤナ自身が肉声で答えるコーナーがあります。ここではよく聞かれる質問に対するミンヤナの回答を抜粋して掲載します。

——なぜミンヤナさんの作品には句読点がないのでしょうか。

ミンヤナ 句読点がないのは、句読点とはコードだからです。それは理性の言葉であり、公の言葉であり、アナウンサーの言葉であり、政治家の言葉であり、行政の言葉であり、とても文明化された言葉なのです。だから、句読点を取り去ることで、病気の言葉、熱を持った言葉、告白の言葉を復権させて、これにチャンスを与えることができるのです。自分の家や地下鉄の中、喫茶店などで、恋の話や家族の話をするときには、言葉が洪水のように溢れ出てくるでしょう。それに、自分のテキストの、句読点のない言葉でできた四角を見ていると、ほとんど肉体的な快楽が湧き起こってきます。これは建築であり、絵画であり、レトリズムの詩であり、とても官能的なものなのです。

——では、句読点がない場合、俳優は何をしなくてはならないのでしょうか。

ミンヤナ そんなに句読点がないことを大げさに考えることはありません。俳優はまず断片の全体をテーブルの上に置いて、そこから浮かび上がってくる意味を捉えればよいのです。こういったよい作業をすることになると、どの頁に何があったか憶えられるし、自分でそのテキストをオーケストレーションしていくことになるでしょう。だから、句読点がないことで、俳優は意味を見つける作業をして、それをもとに自分自身の作品を創造する自由が与えられるわけです。『アンヌ・マリ』で主演したカトリヌ・イエジェルという大女優は、戯曲に書いていないのに、二つの言葉の間に30秒の間を入れました。これが俳優による創造です。ベケットの『幸せな日々』のように、「ここで笑って、ここでやめると、ト書きで俳優の動きをきっちと指定する場合もありますが、その場合には、そのト書きは全て意味を持っているのですから、俳優はそれに従わなくてはなりません。でも、それが書いていないテキストの場合には、そういったことを創造していくのは俳優なのです。

——ミンヤナさんはいつも三面記事をもとにして書いているのですか？

ミンヤナ もちろんそんなことはありません。たしかに『寢室』は三面記事を題材にしていますが、実はそのとき注文されていたのはオペラのリブレットだったのです。でも、わたしはオイディプス王や王女メディアのようなおきまりの人物を登場させるつもりはありませんでした。わたしは今日起こっていることで、何か普遍的で神話的な力を持ったものを探していました。わたしは80年代から新聞の三面記事の切り抜きを始めました。狂牛病とか、そういったものも含めて。それをファイルしたものを眺めていると、オペラのリブレットよりも芝居が書きたくなってきました。わたしはリブレットもいくつか書いていますが、リブレットの時には、曲をつけるために、とても簡潔な、圧縮された台詞を書く必要があります。でも、わたしが描きたかったのは、わたしたちの感情を激しく揺さぶる、規格化されていない、一線を越えてしまった人たちで、このような人たちの言葉を扱うには、もっと余裕のある言葉が必要でした。わたしが関心を持っているのは、内容よりもむしろ形式です。たとえば気が動転してしまった人の感情が爆発するときに、その人が話す形式に興味があるのです。

(翻訳・編集 横山義志)

アンヌ・マリ Anne-Marie

シンポジウム「フランス演劇の現在」(上演終了後開催)
パネリスト 川村毅、宮沢章夫、石井恵、長島確、八角聡仁

12月15日(土)6:00開演

作＝フィリップ・ミンヤナ

演出＝宮沢章夫

出演

小田豊 男1

塚本耕司 男2

宋ひさこ 女

太野垣諭 ト書き

スタッフ

舞台監督 武藤晃司

照明 大野道乃

音響 豊口謙次

翻訳 長島確 大磯仁志

宮沢 章夫 (みやざわ あきお)

劇作家・演出家・作家。1956年静岡県生まれ。多摩美術大学中退。80年代半ば、竹中直人、シティーボーイズらと組んだ「ラジカル・ガジベリピンバ・システム」で全作品の作・演出を手掛ける。90年、作品ごとに俳優を集めて上演するスタイルの「遊園地再生事業団」の活動を開始し、『ヒネミ』(92年)で岸田戯曲賞受賞、2000年に活動を休止。朝日新聞連載『青空ノート』をはじめ、エッセイも多数。99年に発表した『サーチエンジン・システムクラッシュ』(文藝春秋)が芥川賞候補に選ばれ、注目を集める。最新戯曲に『月の教室』(白水社刊)がある。現在、京都造形芸術大学映像舞台芸術学科助教授。

小田 豊 (おだ ゆたか)

1971年、早稲田小劇場(現SCOT)に入団。『トロイアの女』(74年)をはじめとする鈴木忠志作品に出演。78年、劇団「真空艦」の旗揚げを経て、80年劇団「卍」に所属。83年に竹内統一郎、豊川潤らとともに「桃の会」結成。88年よりフリーとなる。主な舞台として『十二人の怒れる男たち』『日本人のへそ』『知覚の庭』(宮沢章夫演出)『坂の上の家』『ガリレオの生涯』『仮釈放』『棋人』『バルコン』などがある。スタートダッシュ所属。

塚本 耕司 (つかもと こうじ)

1962年生まれ 東京都出身。95年、実兄塚本晋也監督作品「TOKYO FIST」でスクリーンデビュー。翌年同作品で96年度キネマ旬報社新人男優賞を受賞する。その後、「ポストマン・ブルース」「大怪獣東京に現わる」「五条霊戦記」など映画を中心に、ビデオ、テレビで活動。主な出演作品に「プリンスホテル」「FULLMETAL機道」「実録・広島やくざ戦争」「ムルデカ」等。今回は舞台初出演となる。来年2月には松田優作13回忌追善公演「水銀」(東京・ペニサンビット)に出演。またプロボクサーのトレーナーとして若手の育成にも動んでいる。

宋 ひさこ (そう ひさこ)

1969年生まれ。神奈川県出身。90年ごろより舞台衣裳スタッフとして演劇に関わる。94年プラチナペーパーズ公演『櫻の園』(堤泰之演出)に出演し、俳優としての活動をスタート。95年より遊園地再生事業団の作品へ参加。『知覚の庭』『あの小説の中で集まろう』(97年)、『ゴー・ゴー・ガリー！』(98年)、『おはよう、その他の伝言』(99年)。その間、OJO!、プリセタなど他劇団の作品にも出演。現在はフリーとして活躍中。

長島 確 (ながしま かく)

1969年生まれ。訳書にベケット『いざ最悪の方へ』。他の翻訳にはベケット「あしおと」「ロッカバイ」、ジューベン「本能」と人間機械——ジョセフ・ナジの横顔——など。また、ピーター・ブルック演出『しあわせな日々』『ザ・マン・フー』の日本語字幕操作、『ハムレットの悲劇』字幕翻訳・操作を担当する。

大磯 仁志 (おおいそ ひとし)

1969年生まれ。早稲田大学第一文学部卒。立教大学文学研究科博士後期課程在籍。J・M・G・ル・クレジオを主に、現代フランス小説を専攻。共訳書にジョゼ・ビエールほか著『クリスマス式クリスマス・プレゼント』(水声社)。